

駅チカ体験を通じて学生の定住化を図る

Promoting student settlement through the experience of proximity to stations!

-targeting the university students-

創価大学法学部法律学科 和足ゼミ
 石若博, 安藤和美, 石橋沙愛, 山宮佳恵, 池邊正浩, 福田一斗
 指導教員 和足憲明
 創価大学法学部法律学科

日本語アブストラクト：八王子市の課題は学生の卒業後の定住化である。学生の定住化には駅チカ体験を通じて利便性を認識してもらうことが重要である。

キーワード：学生の定住化、駅チカ体験、利便性の認識、奨学金返還支援事業

1. はじめに

本報告の問題意識は、「八王子市に住んでいる大学生が卒業後に他地域へ転出し定住化しない」というものである。実際に、八王子市の年齢別の転出者の割合を見ると、20～29歳の転出者が多く、大学卒業時や就職時に市外に転出する学生が多いという現状がある(八王子市 2020)。

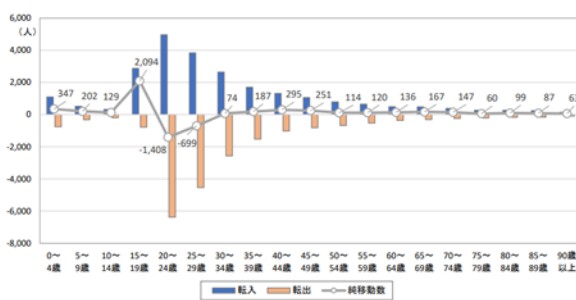
そこで本報告は、「八王子市に住んでいる大学生が卒業後に他地域に転出している」という問題意識から、「どうしたら学生の定住化を図ることができるのか」という問いを提起する。本報告はこの問いについて、現状を分析し、課題を抽出し、課題の解決策を提案するものである。

2. 現状分析

第1に、八王子市内の転入者・転出者数のグラフを見てみると、15～19歳では転入超過となっているものの、20～24歳になると、転出超過となっている(図1参照)。以上の分析から、学園都市である八王子市において、学生の大学卒業時の転出を減らすことが課題であるということがわかる。

【図1】年齢別 転入者数・転出者数 (2019)

■年齢別 転入者数・転出者数(令和元年(2019年))

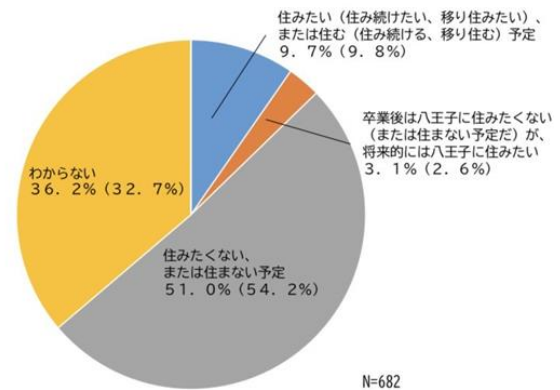


第2に、学生を対象に行われた卒業後の八王子市への定住意向のアンケートによると、「住みたくない・住まない予定」と答えた学生は54%であり、過半数

を占めている(図2参照)。以上の分析から、多くの学生にとって、卒業後の八王子市への定住意向は高くないことがわかる。

【図2】卒業後の八王子市への定住意向 (2024)

ア 卒業後に八王子市内に住みたいと思いますが、または住む予定ですか。【1つ選択】※()内は前回調査結果



卒業後に定住しない理由は、①「移り住む理由がない」が50.3%と最も多く、②「地元に戻る」が27.0%、③「愛着がない」が20.4%、④「交通が不便」が18.9%、⑤「買い物が不便」が7.3%という結果になった(図3参照)。

【図3】八王子市内に住みたくない理由 (2024)



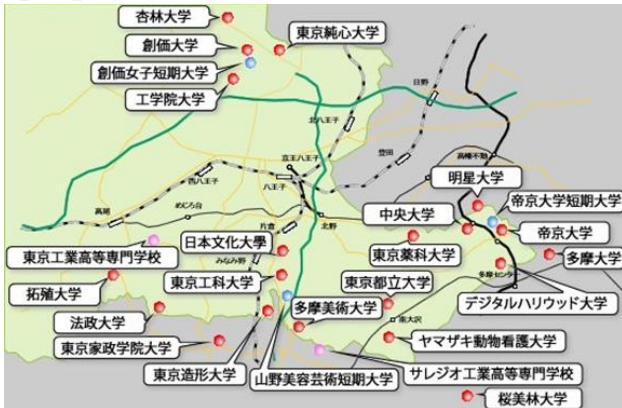
上記の理由のうち、①と②については改善を図ることが難しい理由である。一方、③と④と⑤は、政策によって改善可能な理由である。そこで、学生の定住化を図るには、愛着を形成し、利便性（交通利便性・買い物利便性）を認識してもらうことが重要である。

確かに、愛着の形成は重要な問題である。この点で、八王子市は「定住促進奨学金返還支援事業」を通じて、返還支援の交付を受けた定住者に地域活動を義務付け、愛着の形成を図っている。しかし、愛着の形成だけでなく学生に利便性を認識してもらうことも重要であると考えられる。なぜなら、学生アンケートによれば、利便性の悪さ（交通+買い物）を理由とするものが合計26.2%もあり、実質的に最大の理由となっているからである。

それでは学生が認識するように本当に八王子の利便性は低いのだろうか。むしろ逆である。八王子駅周辺ではJRの中央線・横浜線・高崎線と京王線を利用可能であり、交通利便性は高い。また、駅周辺には商業施設、飲食店、スーパーマーケットがあり、買い物利便性も高い。このことから、学生たちが「八王子における駅チカの利便性」を十分に認識できていないと考えられる。

なぜ多くの学生は利便性を認識していないのだろうか。その理由は、キャンパスが郊外に立地しているからであると考えられる（図4参照）。

【図4】八王子市内におけるキャンパスの立地状況



中心市街地から離れた場所にキャンパスがあるため、学生は通学時や普段の生活において駅周辺の利便性を十分に体感する機会がない。また、下宿暮らしの学生の多くは大学周辺に住んでいるため、駅周辺の利便性を実感できる機会は少ない。

3. 課題抽出

以上の現状分析から、学生の定住化を図るには、次の2点が課題であるとわかる。第1に「愛着の形成」を図ることである。実際に、八王子市は「定住促進奨学金返還支援事業」によって「愛着の形成」を図っている。しかしその手続きには欠陥がある。現在の手続きは「八王子への定住の意思決定→交付認定申請→地域活動による

愛着の形成→交付の申請・決定」というプロセスになっている。これでは学生の定住決定後に愛着の形成を図るということになり、八王子への定住を考えている潜在的な学生層を獲得できない。第2に、八王子市の現実の利便性と学生が認識する八王子の利便性に大きなギャップが生じていることである。学生は郊外のキャンパスに通学するとともに、下宿先もキャンパス周辺が多い。その結果、学生は八王子の交通利便性や買い物利便性を認識する機会がなく、卒業後に転出すると考えられる。

以上の検討から、学生の卒業後の定住化を図るには、次の2つの課題を解決する必要がある。第1に、「定住促進奨学金返還支援事業」の手続きを見直し、「交付認定申請前の段階」、すなわち「定住決定前の段階」において「地域活動の機会」を設けることで、幅広い層を対象とするとともに、愛着の形成を図る必要がある。第2に、学生のうちに「駅チカの利便性」を「生活」という観点から認識してもらう機会を設けることが必要である。そこで、上記2つの課題をまとめて解決するため、以下の政策を提案する。

4. 政策提案

私たちが提案する政策は、「定住促進奨学金返還支援事業と学生の駅チカ体験による利便性の認識を組み合わせること」である。

「定住促進奨学金返還支援事業」の手続きを見直すとともに、学生が駅周辺の宿泊施設において生活を体験する機会を設ける。

具体的には、次のとおりである。学生に駅周辺の施設に宿泊してもらう。そのうえで、第1に、商業施設・飲食店を利用しながら駅チカの利便性を認識してもらう。第2に、都心部でのインターンや就職活動に際して、郊外学生が移動する時間を軽減するとともに、都心への通勤における八王子の利便性を意識してもらう。第3に、駅チカの生活体験に地域活動の実施を組み込むことによって、地域への愛着を育む。

場所と期間、費用については、駅周辺で宿泊施設を活用し、4泊を上限として宿泊する。また当該事業によって多数かつ継続的な客室稼働率を見込めることから、宿泊施設との交渉を通じて費用を軽減する。もっとも学生も費用を一部負担する。

宿泊期間の活動要件として、「地域活動への参加」を設定する。地域活動の内容については、現行制度と同じく、とくに制限は設けない。その結果、「地域活動への参加」という要件のハードルは低い。したがって、当該事業の多くの利用者が要件を達成することが可能となっている。地域活動の具体例としては、中心市街地にある商業施設、飲食店、娯楽施設等といった地元店舗をSNS上でPRすることが挙げられる。これらの地域活動と「定住促進奨学金返還支援事業」の要件を紐づけることによって、多くの学生に対して定住化のインセンティブを提供できる。

以上の政策を実施することによって、八王子市の大学生の定住化を促進することができると考える。